

## 第3回日中病理学シンポジウム（山東大学医学部）と研究打ち合わせ会議報告

蓮井和久  
鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科  
(難治ウイルス病態制御研究センター)  
分子ウイルス感染研究分野・講師

### 1、計画立案と参加者

中国東北地方の鼻咽頭の悪性リンパ腫の研究が、パイロット研究と技術的な問題の解決が出来て、多数例での病理疫学的研究の段階となり、その一部は王嘉先生の学位論文(JCEH 49: 97-108, 2009) となり、大きな意味での次ぎの研究構想の立案が必要となって来た。また、榮鶴義人教授が20年程前に中国鉄道省の招待で訪ねた孔子の町である曲阜は非常にすばらしいと勧められるままに、2008年暮れに、第3回日中病理学シンポジウムと研究打ち合わせ並びに研究計画会議を山東省ですることに決めた。

日本の学会の開催と異なり、中国の学会は、特定の責任者の下に学会が開催され、会場となった所の関係者が開催に協力する形式で学会が行なわれることから、それに従い、第3回日中病理学シンポジウムは、蓮井和久が提案して、中国医科大学の賈心善教授が山東大学の周庚寅教授の協力を得て、組織者を蓮井和久（鹿児島大学）、賈心善（中国医科大学）、周庚寅（山東大学）の3名として、開催されることになった。その参加証明書には、この3名の署名を入れることになった。



研究打ち合わせ並びに研究計画会議は、基本的にセミクローズであるが、ヒヤリングないし超域的な研究活動の意味を含めて、将来的に共同研究が実施できる方々の参加を呼び掛けることにした。

この計画への参加者は、当初、学術部門と文化交流部門で合わせて、15名前後かなと思っていたのであるが、新型インフルエンザの流行、関係者の日程上の問題から、学術部門は蓮井、賈、竹屋元裕熊本大学教授（病理学）、永井拓鹿児島大学助教（免疫学）、奥村晃久鹿児島生協病院医師（病理部）の5名で、文化交流部門は日高旺（元鹿児島テレビ社長）、日高薫歴史博物館准教授（美術史）、平山秀子（平山歯科医院院長夫人）の3名となった。

今回の旅行は、従来からの中国国際旅行社福岡支店にお願いすることにしてしたが、出発の直前に、新会社である日本中国国際旅行社にその社員の殆どが移動したことから、引き続き、その新会社にお願いすることになった。

## 2、出発、青島での研究打ち合わせ会議 I、

済南へ

鹿児島からは2009.8.2（日）の9:15発の新幹線で、博多に向い、博多駅から福岡国際線ターミナルへはタクシーで向った。午後1時に、青島空港で合流予定の賈心善教授を除く7名が集合出来た。14:55発の中国東方航空 MU536にて出発し、1時間50分程で、中国の山東省の青島国際空港に到着した。到着ロービーに出ると、既に、瀋陽から中国国内線で1時間前に到着していた賈心善教授と合流した。青島中国国際旅行社のスルーガイドの張さんと王さんと合流して、青島新市街に位置する宿泊ホテルの麗晶大酒店ホテルに向った。夕食は、青島ヨットクラブに隣接したホテルのレストランにて食べ、従来の中国の街の印象とは異なる海の町青島を肌で感じた。

青島国際空港ロビーで、麗晶大酒店ホテルのロビーで、青島駅で、済南駅到着ホームで



夕食後に、急用から第3回日中病理学シンポジウム後に帰国することになった竹屋教授を入れた**研究打ち合わせ会議 I**を、蓮井、賈、竹屋、永井、奥村の5名で、ホテルの部屋で壁

に持参したプロジェクターにてスライドを投射して行なった。7月初旬の東京ビッグサイトでのバイオアカデミックフォーラムで報告した多数例での病理疫学的検索と細胞死解析の結果の新規性を説明するスライドと2007年9月のハルビン医科大学と吉林大学医学部でのセミナー（研究成果報告）と中国医科大学で第2回日中病理学シンポジウムで報告した少数例でのパイロット検索での結果の説明を行ない、NK/T細胞性リンパ腫を更にNKT細胞性リンパ腫とNK細胞性リンパ腫に区分出来る可能性と間質細胞の解析について議論し、後者の更なる検索の重要性が議論され、参加者の意見の一致が得られた。

翌日は、旧市街地に位置する青島駅より、8:55発の中国の新幹線（D6004）で出発し、12時前に済南駅に到着した。昼食を済ませ、宿泊するソフィテルホテルにチェックインし、2時からの山東大学医学部での第3回日中病理学シンポジウムに向った。

### 3、第3回日中病理学シンポジウム参加と親睦会と済南

第3回日中病理学シンポジウムは、山東大学医学部の基礎医学系の研究棟の病理学教室の講義室で、2009.8.3の午後2時過ぎから行なわれた。以下の講演がそれぞれ30分前後で行なわれ、途中でコーヒープレイクがあった。

第3回日中病理学シンポジウム（竹屋、永井、蓮井、Zhang Xiaofang、講演を終えて、研究棟玄関の掲示）

#### 第3回日中病理学シンポジウムプログラム

1. **Motohiro Takeya** and **Yoshihiro Komohara**. M2 anti-inflammatory macrophage phenotype and tumor micro-environment.

Department of Cell

Pathology, Graduate School of Medical Sciences, Kumamoto University.

2. **Taku Nagai**, Masashi Tanaka, Kazuhisa Hasui, Toshihide Nishimura, and Takami Matsuyama. Efficacy of recombinant immunotoxin against folate-receptor beta for tumor and chronic inflammatory diseases. Department of Immunology, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences.

3. **Kazuhisa Hasui**, Wang Jia, Xinshan Jia, Takami Matsuyama and Yoshito Eizuru. Nasal NK/T-cell lymphoma in Northeast China. Division of Persistent & Oncogenic Viruses, Kagoshima University Graduate School of Medical and dental Sciences, and Department of Pathology, China Medical University.

4. **Zhang Xiaofang**. Co-suppression of MDR1 (multidrug resistance 1) and GCS



(glucosylceramide synthase) restores sensitivity to multidrug resistance breast cancer cells by RNA interference (RNAi). Department of Pathology, Shandong University School of Medicine.

#### 参加者リスト

##### Japanese side

###### (Academic part)

- 1: Kazuhisa Hasui, Assistant Professor of Kagoshima University, Graduate School of Medical and Dental Sciences
- 2: Motohiro Takeya, Professor of Kumamoto University, Graduate School of Medical and Pharmacological Sciences
- 3: Taku Nagai, Research Associate of Kagoshima University, Graduate School of Medical and Dental Sciences
- 4: Teruhisa Okumura, Director Doctor of Pathology, Kagoshima Seikyoku Hospital

###### (Culture part)

- 5: Umashi Hidaka, emeritus President of Kagoshima TV
- 6: Mrs. Hideko Hirayama, Mrs. of Director Doctor of Hirayama Dental Clinic
- 7: Kaori Hidaka, Associate Professor of National Museum of Japanese History

##### Chinese side (Academic part)

###### A: China Medical University

- 1: XinShan Jia, Professor of Pathology, China Medical University

###### B: Shandong University

- 1: Genyin Zhou, Chairman of Institute of Pathology and Pathophysiology, Shandong University School of Medicine; Professor of Pathology; Director of Shandong Academy of Pathology
- 2: Haiqing Gao, Director of Qilu Hospital, Shandong University
- 3: Hui Zhou, Director of the Department of International Exchange and Cooperation, Qilu Hospital, Shandong University
- 4: Tingguo Zhang, Director of Department of Pathology, Shandong University School of Medicine; Associate Professor of Pathology
- 5: Lining Zhang, Director of Department of Immunology, Shandong University School of Medicine; Professor of Immunology
- 6: Cuijuan Zhang, Associate Professor of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 7: Kun Mu, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 8: Xiaojuan Wu, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 9: Chunyan Hao, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 10: Li Li, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 11: Junhui Zhen, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 12: Hao Wang, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 13: Xiao Wang, Lecturer of Pathology, Shandong University School of Medicine
- 14: Xiaofang Zhang, Doctor of Pathology, new member of Institute of Pathology and Pathophysiology, Shandong University School of Medicine
- 15: Weiwei Li, Doctoral Student of Pathology, Shandong Univ. School of Medicine
- 16: Zhaohua Liu, Doctoral Student of Pathology, Shandong Univ. School of Medicine
- 17: Tingting Shen, Doctoral Student of Pathology, Shandong Univ. School of Medicine
- 18: Hui Zhang, Doctoral Student of Pathology, Shandong Univ. School of Medicine



免疫学教室の前で、心臓血管研究施設 記念写真を撮り、中国での重点研究施設に認定されている免疫学教室、解剖学教室（人体標本博物館）、心臓血管研究施設を見学した。

夏休みで、所謂、医学生と大学院生は居なかったが、希望して研究を行なっている将来期待される学生が実験を行なっていた。

また、心臓血管研究施設では、最新の研究機器が揃っていた。



その後、山東大学招待の懇親会が行なわれた。

周庚寅教授は、和歌山県立医科大学の覚道健一教授の教室に留学経験があり、親交があるそうである。竹屋教授は、学生時代は男性コーラスに属し、現在もコンサートの予定があると言い、突然、参加されていた副病院長と外事部の先生と共に中国語で“海“を熱唱し、喝采を浴びた。そして、更に、親交は深まった。

二次会は日本側の有志で行ない、第3回日中病理学シンポジウムと今回の企画の成功を祝し、済南の夜は更けた。

### 千仏山の門、ロープウェイ、済南遠望、日中合作の大仏

翌日（2009.8.4）は、小雨もようであったが、ロープウェイで、千仏山に登り、済南の町を遠望した。霧かとも思われるが、どうも、近隣の工業地帯からのスモッグであるようである。千仏山には、舜を祭る神社、道教の神社、仏教の寺が同居するも、舜を



祭る神社が高位とされていた。文革の破壊を逃れた磨崖仏には興味を持たれた。また、その山腹には、日中合作の金箔に輝く大仏が見られた。「天下第一泉」といわれるボク突泉は、大昔から、泰山山系の雨が、地下の硬い岩盤を流れて来て、この済南周辺で泉となって噴き出しているのだそうである。大明湖は、人工的な湖であり、蓮の花が見られた。因みに、この地方の名物料理に蓮の花と蓮根の料理があった。蓮の花の料理は、砂糖が十分に効いたデザートといったものであった。（千仏山の上宮、道教寺院、舜の寺院、仏教寺院、文革を逃れた磨崖仏）



### ボク突泉、大明湖

その後、明日、青島から帰国する竹屋先生とそのスルーガイドの王さんと別れて、曲阜に向った。



## 4、曲阜

### 靈岩寺、鐘堂、鼓堂、仏塔

曲阜に向う途中の靈岩寺には、天下第一塑像が祭られていた。その塑像の内部には、絹布で作られた内臓模型が



納められていたようで、その作製時代には既に相当な解剖学的知識の集積が仏教にはあったことが推察されると共に、即神仏（ミイラ）を避けた結果、塑像が作られたのかなとも思われた。少林寺と並ぶ古刹であり、土砂崩れで埋没していた遺跡を随所に見るようである。僧侶たちの墓地では、朝に死ぬと鐘、夜に死ぬと太鼓、それ以外の時では四角の墓石塔を作り、隋・唐時代には、日本人留学生も居て、その筆跡を墓碑に残しているそうである。



### 闕里賓舎ホテル、孔子采

曲阜で宿泊する闕里賓舎ホテルには、17:00 頃に到着したが、その玄関には、赤絨緞が引かれて、多数の歓迎の人々が居た。何事かと、玄関を入ると、そこには台湾の国民党の副主席を歓迎する横断幕があった。



夕食に、フカヒレスープを含む孔子采を試食出来た。中国の宴席の時に、所謂、お品書きを見たことが無かったので、孔子采のお品書きが欲しいとス

ルーガイドの張さんにお問い合わせすると手書きの中国語のものを持って来た。きっと、綺麗な孔子采のお品書きは記念になるかなと思われたが、料理そのものに知識がないので、諦めた。

その後、論語をミュージカル風に劇化したショーがあると云うので、見に行った。気に入り、ホテルのお土産屋さんでそのCD ビデオを購入した。



夜と次ぎの朝には、台湾の国民党の副主席の宿泊の為か？ホテルの廊下にはSPが立ち、逆に安全であったと思われた。

### 孔子廟、門、参拝記念の石碑の東屋、正殿

朝食後、現地のガイドの舜さんに連れられ、徒歩で、孔子廟と孔子府を見学した。孔子廟では、明と清代の皇帝や高官の参拝を記録した石碑とその覆い建物が目立った。



### 孔府の魯壁と子弟教育の太陽を食せんとする奇獣

当時は、孔子直系の家族は、天下一家と称されて、皇族に次ぎ官僚よりは上位とされていたようであるが、所謂、高官になったものは居らずに、明と清での封

建制度の基盤としての儒教の性格を反映したものであるようである。孔子府は、孔子直系の子孫の住居であり、明代に壁の改築中に、焚書坑儒の逃れた孔子関連の書籍が壁から発見された魯壁と称されているものがあつた。その発見された書籍は、何処に保管されているのかと聞いたが返事が無かつた。国宝として、保管されているのかなと思つた。また、孔子一族の子弟教育に用いられたと云う太陽を食さんとする奇獣の壁絵には興味を持てた。

#### 孔林、優しい表情の獅子、孔子の塚、魯の城壁の一部、魯の城壁の外堀の一部

昼食後、孔子一族の墓地である孔林を訪ねた。その門の一部には、魯の城壁が残り、その外側には、外堀の一部が川となり残っていた。孔林は、丁度、魯の城壁の北側に接し、



都市国家での墓地の位置に一致しており、文化人類学的観点から興味ある事実であるようだ。光林の静寂と孔子の塚を訪ねて、次ぎの泰安へ向つた。

#### 5、泰安、そして、済南經由青島へ

泰安には、5時過ぎに、宿泊予定のラマダホテルに到着した。リゾート風の豪華ホテルで、中国国内で幾多のホテル賞を受賞しているそうである。

当初の計画では、研究打ち合わせ会議 I の予定であつたが、既に、青島で済ませたので、賈先生とのんびりとした今後の研究の進め方に関しての話をする事が出来た。

ホテルの部屋からインターネットでメールチェックすると、研究の倫理申請の審査委員会振り分けの依頼のメールが来ていた。持参したノートパソコンからアドベリーダーを削除していたので、そのダウンロードに少々手間取つたが、早々に、対応することが出来た。便利なものである。

泰安の町中のカラオケルームを試したいと云う有志に誘われて、泰安の町中を見て、その夜は更けた。



翌日（2009.8.6）は、午前中に泰山を、午後には岱廟を見学した。

**泰山ロープウェイ、天街、玉皇頂、泰山ロープウェイを下りて**

泰山観光会社のバスに乗り換えて、ロープウェイ駅に到着。かなり長く、小さな峰峰を超えて、南天街へ、そこから徒歩で石階段を登ることになった。天街からは、南天門、そして、明の時代に作られて基盤が四方形でその上に円形の儀式場のある遺跡を見た。雲にて、遠望は出来なかった。階段の途中には、道教の寺院や孔子廟があり、唐摩崖を経て、泰山の頂上である玉皇頂に至った。足は悲鳴をあげていた。所謂、漢武帝の無字碑を見た。



天街からの階段、唐摩崖、無字碑

秦の始皇帝の前に古代中国の 72 名もの皇帝が泰山で封禪の儀式を行なっ

て来て、この泰山は古代中国の魯と斉の国境線でもあったそうである。秦の始皇帝の古代中国の統一の最後が斉との戦争であり、その意味からも、ここ泰山での封禪の儀式は意味のあるものなのかなと思った。南天街のレストランで小休止して、ロープウェイで下山

した。

岱廟の門、三宝のコピー、行宮の玉座でのコスプレ（永井）



岱廟の皇帝の参拝記念石碑、泰山を讃える石碑とスルーガイドの張さん、清朝皇帝の書



岱廟の正殿前の日本からの奇石（芙蓉の文字）、正殿



昼食後、岱廟を訪ねた。岱廟の東御座には、岱廟の三宝のコピーと玉座があった、天こう殿（中国の三大宮殿建築の一つ）には、泰山神の行幸図があり、興味深かった。

その後、この地域の湖沼で養殖される淡水真珠の店に行った。所謂、カラス貝に、その肉片を入れることで、核のない真珠ができるそうであるが、真円の球体ではなく、歪な球体だそうである。しかし、その多くは貝殻に付着して、宝石とは扱われずに、化粧品等の材料となるそうである。貝の肉質に出来た真珠が所謂宝石の真珠になる。最近では、金色や紫色の天然でしか産しないものが人気があるそうである。

翌日（2009.8.7）は、青島への移動である。済南から新幹線で、青島に向うのであるが、少し時間があれば、山東博物館ないし黄河を見ることが出来ないかとスルーガイドの張さんに訪ねたが、この10月に山東省である日本の国体に相当する運動会の為に博物館は改修中であり、どうも、所謂、国体を契機に、省内の整備が進められているよである。また、黄河河畔に行くには時間が足りないとのことであった。また、青島と済南の中間に、野菜栽



培で有名な所であるが、その地下に齊の都城跡があり、地下博物館となっているようで、新幹線の利用でなく、青島から全行程を専用車での移動であれば、訪ねることが可能だそうである。もう一回、山東省旅行を計画する必要があるようである。

#### 済南駅（待ち合い室で）

#### 周庚寅教授との再会

済南 13：29 発の新幹線（D6011）に乗ろうと、済南駅に行くと、丁度、青島での病理技士さんの試験に向う周庚寅教授と会った。中国には、医療技術大学も技士学校もなく、最近は医学部卒業生の中に、技士になるのものが増えているそうである。試験も、ペーパー試験に、標本作製と凍結切片作製能力検査があり、優秀者は表彰するそうである。



賈心善教授に聞くと、技士長は教授待遇であり、技士の多くは医学部出身者で医師免許を持たないそうである。その分、技士の水準は高くなって来ているそうである。日中での医学部の教育や医師国家試験の事情が異なるようである。以前に、中国医科大学で計画された病理医育成の8年学士博士コースはどうなったか聞くと、病理医になれない場合や臨床医学に進む場合に、医師国家試験が受験出来ない等の問題があり、難航しているとのことであった。因みに、中国では、医学部を卒業して、基礎医学の博士過程に進むと、その後に、基礎医学（病理系）医師国家試験を受験するそうであるが、臨床医学の実務家になれるのか定かでない。

青島駅には、午後5時頃に到着して、先に宿泊した麗晶大酒店ホテルにチェックインした。



## 6、青島、研究打ち合わせ会議 II（研究計画会議）

小魚山からの青島遠望、海水浴場、

ドイツ人の街の設計による小高い丘の木々に囲まれた旧市街



### 迎賓館、会議室、面白いシャンデリア

朝から、小魚山に登り、青島の市街地の遠望を楽しんだ。次に、ドイツ租界時代と日本租界時代の総督府である迎賓館を訪ねた。建築費の高騰により初代ドイツ総督は短期間で解任されたと云われているように正にドイツ建築というものであった。日本総督府時代の金庫が残されていた。現在の中国の建国当初には、毛沢東が宿泊し、重要な国家会議も開かれた会議室も残されていた。何となく、高級ドイツ料理店にでも改装すれば、更に、人気が高まるかなとも思われた。青島ビールが有名であるので、スルーガイドの張さんに、青島では、ドイツ料理かビヤホールでの夕食はできるのかと聞いた所、ドイツ料理のレストランもビヤホールもないとのことだった。残念であった。



青島ビール工場の博物館（生ビール用のタンクは当初は廃棄された爆弾を用いていたそうで、別名爆弾ビールとは生ビールのことである）

昼食は飲茶で済ませて、青島ビール工場の博物館を訪ねた。ろう山の清水を用い、1903年にドイツ人により建設されたビー

ル工場であるが、第一次世界大戦後は、日本人による経営がなされ、その時期に、日本のアサヒビール等が分家しているようである（アサヒビールは1889年に大阪麦酒会社として発足し、1906年に札幌麦酒会社と日本麦酒と共に大日本麦酒株式会社を設立、1949年に分割により、朝日麦酒株式会社が出来ているとアサヒビールのHPにある。どうも、大日本麦酒株式会社が青島ビール工場の経営にあったいたようである）。第二次世界大戦後は中国人による経営となり、輸出品のない時代の中国における唯一の輸出産業であって、中国主席等が表敬訪問している工場である。その博物館を見学していて、濾過前のビールとビアホールでの生ビールの味は格別であった。また、黒ビールもあるようで、その後、夕食の時に、黒ビールはあるかと尋ねたら、全く、市中では人気がなく、供給されていないようであった。夕食は、しゃぶしゃぶを味わい、ホテルに戻った。

### 研究打ち合わせ会議 II（研究計画会議）

ホテルのロビーラウンジにて、蓮井、賈、永井、奥村の4名で研究打ち合わせ会議 II（研究計画会議）を開いた。

現在の研究は、海外学術と云う海外の研究フィールドと日本での研究の組み合わせで実施して来ており、この特徴が研究に特色を与えている。病理組織標本での病変解析では、新たな解析方法には技術開発が必要となり、成功すれば、国内研究機関の特許申請と共に国際共同研究としての研究成果をあげることが可能であり、また、医学教育研究にも寄与できることから、今後も、この研究形態の維持による研究の推進と拡大の同意が得られた。



有志は、その後、ホテルのカラオケを試し、最後の夜は更けた。

## 6、帰国

帰国は、11：05 発の MU535 便であるので、8 時過ぎにホテルを出発し、青島国際空港に到着した。国際線への出国検査に向う前に、賈心善教授とスルーガイドの張さんと別れた。出発前の時間に、ちょっとしたお土産のワインを買い、搭乗し、定刻に、福岡空港に到着した。

ここで、千葉に国内線で帰る日高薫さんと別れ、タクシーで博多駅に向った。早めの新幹線に乗ろうと、みどりの窓口に行くと、熊本駅構内の事故により、一つの新幹線の運航のキャンセルがあり、指定席が予約できないとの由にて、自由席に乗り、午後 7 時前に鹿児島駅に到着した。

第3回日中分子病理学シンポジウムは、日本からの参加者が少なかったが、シンポジウムには、夏休み中でも、多くの山東大学からの参加者があり、打ち合わせ会議も、それなりの成果を得られた。

2012 年まで、次期の大型研究費の獲得は達成されていないが、研究を進めるにつれて、研究計画の妥当性が更に明らかになっている。今後を、期待し、次なら研究成果の公表と討論の場として、第4回日中病理学シンポジウムを組織したいと思っている。